



小林嘉四郎の墓石

当時の干魃の凄まじさは、言語に絶するものがあり、読む人の目をおおうものがある。徳川末期は政情不安から農村の行政秩序の乱れなどにより、権益権限の自己主張がまかり通る時代であった。

嘉永元年の大干魃は、必然的に水論争を生む要素を持つていたのである。掘込は矢田野に流入する水を、車堰を設けて一滴も流さず、矢田野村民は、その対策に苦慮した。庄屋を通し、水車堰の撤去を申入れたが、相手にされず、このままでは村民の死活問題だとして、代官所に申し立てたのである。

この時、矢田野を代表したのが、小林嘉四郎であった。古文書によれば、両村ともに死活問題であり、関係庄屋、代官所などの調停もままならず、矢田野代表も困り果ててしまった。

その時、小林嘉四郎の村を愛する心意気と、理路整然とした社会秩序維持のための理論と信念が代官所のとりに上げるところとなり、村民の待望していた水利権の確立がなったのである。寝食を忘れ、家業を投げた奮斗努力は村民の賞揚するところとなった。その功績は矢田野村金剛山茂寧寺住職が授けた戒名「瑞祥軒観林義勇居士」によってもよくわかるだろう。

(話者 小林大助)